

京鹿子

平成二十八年六月一日発行
第百一〇二号（毎月一回）日発行

6月号

鈴 鹿 呂 仁

拾 掬 集 その 十

躑 躅 咲 く 内 輪 ば な し の 闇 深 く

車 座 の 一 男 三 女 柏 餅

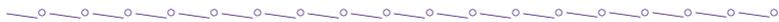
夏 め く や ピ ア ス の 光 る 野 球 帽

テ ロ ッ プ に 編 み か け の 蜘 蛛 放 り 出 す

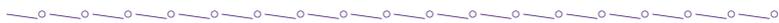
濡 れ 衣 を 拭 ふ で も な し 蓴 採 る

風 聞 の 街 に 梅 雨 の 灯 ま た 一 つ





手順無き恋の止血や青林檎
八桁の番号笑止道をしへ
尺蠖の逃げて本音をひた隠す
とびしまの海霧を走らす安芸の風
野風呂岬にて
緑蔭の風に憩ふや野風呂崎
安芸灘の潮香をのせる緑雨かな
伊予はるか野風呂岬の風五月
梅雨月を抱いてくぐもる遊女墓



— 近 詠 —

鈴 鹿
仁

漁り火

茶屋街の閑かに灼くる石だたみ
花街の柳の風につばめ来る
雪吊け解かれし松の青みかな
漁り火の点景として闇涼し
朝市の潮焼蝦は能登美人



— 近 詠 —

和田 照海

魚島どき

うぐひすの日和ごゑなる野風呂岬

魚島どき物見櫓の野風呂岬

安芸伊予の卯月潮差す野風呂岬

三味草跨いでふんで遊女墓

船宿のひくき廂や初つばめ



松本 鷹根

自戒の影

咲く花に手を差し伸べて聖像

見返りの若葉明りや閑雅仏

漣に面影追うて草の笛

青葦の鬩ぎの丈や湖猛る

藤房の揺れに自戒の影の濃し

近 詠



塩貝 朱千

花吹雪

菩提樹の芽吹き三成辞世の句

百千鳥ひとりの足音など消して

人影を追ふ人影や夕桜

蒼き瀬を恋ひて近江の桜散る

花吹雪各駅停車といふ贅沢

英華採集

連翹や昨夜の文殻畳み干す

京都 杉山 はつ江

夜を徹して自分の思いを綴ろうとするが、なかなか満足する言葉が浮かばない。何度も何度も書き直す。殆どが文殻となつてごみ箱に溜まる。翌日昨日の文殻が気になり読み返すと自身の涙跡が点々と残っている。綺麗に畳み直した作者の目に庭の明るい連翹の花が優しく微笑んでいるようだ。

てにをはの齟齬をほどきて春の水

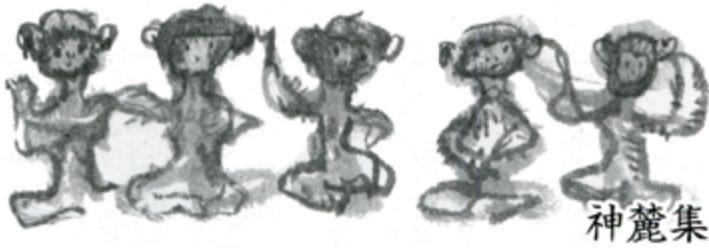
福岡 清原 洋子

我々は、自分の思いを句に認めるのに「てにをは」の重要性を深く認識するとともに自分の思い通りにならない苛立ちを覚える事が多々ある。その苛立ちが齟齬を生むことになるが、齟齬を解消できた時の喜びは一人である。その感慨は、雪解け水が春を呼ぶように春の水となつて体内に流れることであろう。

摘草の野の音も摘みまたひとつ

亀岡 高橋 澄乃

野遊びをしている春の楽しいひと時を掬いひとつているひとコマである。ふと目にした可憐なひと草を摘む時に感じる野の音が、心地よい響きとなつて読者に共鳴感を覚えさせてくれる。音を一緒に摘むと表現した感性も良い。作者には、それを繰り返す至福の時間が緩やかに流れる。



更衣 藤岡 紫水

覚めて追ふ夢のあとさき朝櫻
山容いよよふくよか夏立てり
白牡丹水のやうなる夜を呼び
けし坊主山ふところの山の家
せめてもの老いの嗜なみ更衣

花石榴 沼田 巴字

薔薇崩る遠くでなみのありしころ
菩提樹の花を咲かせて塚一つ
生も死も浄土頼みや花石榴
きらら虫経文の文字ないがしろ
遠郭公人恋ふ心ひとしきり

春の虹 丸井 巴水

ひと言で裏側見ゆる万愚節
身軽にて櫻なだれに巻き込まる
初恋はいまだ錆びなし春の虹
堂守りは落花もろとも塵となす
陰口を夏めく雲が吸つてゆく

草笛 伊藤 希眸

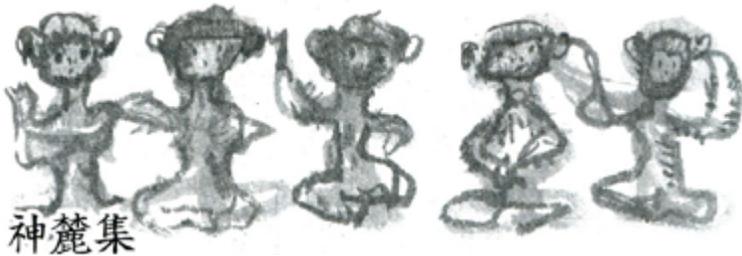
恋猫の声夕暮れを引き止める
かげろふを脱けて大きな翅となり
バツグ一杯介護の本を春疾風
草笛や沼面ゆつくり雲流れ
またも地震夜ざくらの香音立てて

素心 北川 孝子

ひたむきに今を生きよと花洛の忌
白木蓮透きたる風の素心かな
どこまでも甘き自答やさくら二分
御会式桜季を重ねて名をなせり
四温光こころ鎮めの歩幅かな

春愁 直江 裕子

塗り残した白いところが春愁
また桜たうたう俳句やめたんだつて
崩しては石積むあそび花の雲
問ひかけるやうに刃をいれ菊根分け
低迷の桜それでも浮かんでる



ひとり遊び

高木 晶子

霾ぐもり水の底から五芒星
 耐へ難き昔はあらず紙の雛
 山桜ひとり遊びのあらし山
 ひとゝきは流されもして花見舟
 夕ざくら幾世の闇を重ねつゝ

春懈し

木戸 渥子

朝ぼらけ校舎は花に溺れをり
 春懈し匙の蜂蜜切れわるき
 草萌や歯痛の奪ふ詩の中枢
 小細工を後悔もして遅日なり
 鴉は巣を作りわたしは歯を抜かる

芸妓うちは

奥田 筆子

西陣の井戸つながつてゐるこいのぼり
 耳じいんとゆさゆさくら仮分数
 沈黙の機屋の町の花吹雪
 花どきのその日替りの雲の穴
 出迎への芸妓うちはの白い首

平凡な名

井上菜摘子

遠雪崩いつたんお開きにしやう
 魔がさしてどの桜よりさきに咲く
 西大路東大路も花の雨
 終着駅さいごの一人かぎろへり
 平凡な名で出てゆきし恋の猫



夏季吟旅特別吟

鈴鹿呂仁

金沢・能登

白山を後方に加賀の霞みゐる
名城の面影白し加賀霞む
遙かなる唐崎の松みどり濃し
唐崎の松の揺らぎや若葉風
鉤の手に抜ける茶屋街薄暑かな

子燕も一見さんも加賀日和
千里浜に沿うて能登路の余花明り
山藤の揺れ止まずして七尾越ゆ
朝市の薫風おまけ能登訛り
足し算好きの朝市女能登薄暑
越の海へ放つがごとく早苗束
早苗田の光とどめむ越の海
空いちまい棚田千枚あいの風



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

連翹や昨夜の文殻畳み干す

京 都 杉山はつ江

蝌蚪生れて池面の風の気負ひをり

黄水仙ラッピングされ不協和音

こだはりの地酒地たまのたまご酒

患ひを母郷で癒す春火鉢

アリゾナ 伊吹 之博

春愁の最中の地震に落ち着きを

てにをはの齟齬をほどきて春の水

福 岡 清原 洋子

背伸びせし朝寝間遠に初音かな

永き日を使ひ切りたる春夕焼

ヒラリーへ春濤高く旗を揚ぐ

春の雪視界は真白降り続く

オハイオ 水谷 直子

言へること言へなきことに花満ちて

黄水仙やつと緑の顔並べ

摘草の野の音も摘みまたひとつ

亀 岡 高橋 澄乃

そつと吹けば君の居場所へたんぼぼの絮

枯枝に一枚のこる葉のふるへ
生れ立て栗鼠の赤ん坊雪あそび

ひと畝は空にむかひて莖立てり
札 幌 野村 鞆枝

朝市へ残雪の路地抜けゆけり

水切りの小石拾ひて日の永し

雌鳥の貴婦人めきて日の永し

梅が香の通れる居間や光琳図

春動くスチール柵を分解し

春の庭一人佇む昼下り

公園の桜の具合見て帰り

四歳の児の語彙増して梅開く

墓地の礎孫抱き登る古都の春

古都の春孫抱き墓地へ傘寿かな

梅の枝揺らし飛び去る鳥の影

ぼつくりの蒼く鳴りたる暮春かな

花影や水のことばを聞いてゐる

花一片舞うて何かを忘れよと

たんぼぼや此処までおいで大丈夫

菜洗ひもいつしか楽に弥生来る

戻り寒足踏みて待つエレベーター

春の星長寿の系を賜るも

千住越え際立つ獄窓春陽燦

つるし雛ひと針ごとを子に伝ふ

落ち椿けんけんばーと子に還る

酒 田 藤波 松山

さいたま 神田 惣介

千 葉 高野 春子

布川 孝子

松 戸 岡山 敦子

クラス会うたかたの恋春の恋

春温し薄茶の点前背筋伸ぶ

花花花靴の口が開いてゐる

残照の欠片ひらりと夕桜

花の乱鼓のせたる左肩

怒濤まで桜並木の中をゆく

水仙忌眸はとほく京へとぶ

母の眼のふところ深き沈丁花

木の芽どき色ます生のプロローグ

陽性に舵をとるほど陽炎へる

残る日を知らぬ幸せ万愚節

草餅を供へて妣に愚痴こぼす

来し方や恋猫ほどの肝あらば

初蝶の残像脳の断面図

紙の雛目鼻を入れる手の止まり

花の冷え子の好物の肉じやがを

靖国の開花宣言笑顔かな

マスクする間を待たせ散歩道

春みぞれしばし見とれて句を案ず

垣結ひて視野の広がる狭庭かな

陽炎や前頭前葉鎮めをり

春うたげ会話弾ます躍り食ひ

習志野 上野 紫泉

船 橋 元橋 孝之

金子 正道

東 京 野中 圭子

丹羽 武正